

禪研究所開所五十周年・

坐禪堂開單三十五周年記念事業報告

愛知学院大学禪研究所は、昭和四〇年に「愛知学院禪研究所」として創設された。昭和五五年、坐禪堂の開設にもなつて改組され、大学附置研究所として新たに出発した。平成二七年度は禪研究所開所五十周年、坐禪堂開單三十五周年の節目に当たることから、記念事業が計画され、以下の諸行事が挙行された。

記念式典

一月一六日(月)、午後二時より坐禪堂において、「禪研究所開所五十周年および坐禪堂開單三十五周年」の記念式典法要が、佐藤悦成学長兼所長の導師の下、厳肅に執り行われた。

式典には来賓として、奈良康明先生(記念講演会講師、

禪研究所開所五十周年・坐禪堂開單三十五周年記念事業報告

駒澤大学名誉教授、大本山永平寺西堂)、佐藤好春老師(大本山永平寺監院)、井上義臣老師(永平寺名古屋別院監院)、神野哲州老師(愛知県選出宗議會議員)、森棟公夫氏(檀山女学園大学学長)、大谷哲夫先生(曹洞宗総合研究センター所長)、加藤貴啓師(愛知県第一宗務所曹洞宗青年会会長)などのご臨席を賜り、また本学からは中野重哉理事長、小出忠孝学院院长、青山稔後援会会長、関係教職員が多数参列した。

差定・香語・回向は以下の通りである。

記念式典差定

一 殿鐘三会 七下鐘導師上殿

(開式の辞)

一 拈香法語

一 上香普同三拝

一 諷経(般若心経・消災呪)

一 回向

一 普同三拝

一 学長挨拶

一 禅研究所開所五十周年・坐禅堂開單三十五周年記念事業報告

一 理事長挨拶

(閉式の辞)

香語

恭惟值愛知学院大学

禅研究所開所五十周年

選佛場開堂三十五周年吉辰

肅敦請同盟耆旧並覺海龍象衆

相與具威儀

勸請堂中大悲聖僧

以嚴修法会一座

此処綴一句 為普勧語

一朝隔塵影分明

兩鏡交光月色清

照古照今深翠裡

曇華一現自円成

正當即今 如何指陳



記念式典

四海浪平龍睡穩
九天雲靜鶴飛高

伏冀慈悲容納

回向

仰ぎ冀くは真慈、俯して照鑑を垂れたまえ。

愛知学院大学 今月今日、禪研究所開所五十周年並びに坐禪堂開単三十五周年記念式典の吉辰に値う。

虔んで香華灯燭湯菓茶を献備し、摩訶般若波羅蜜多心經 消災妙吉祥陀羅尼を誦誦す、集むる所の功德は、大恩教主本師釈迦牟尼仏 現座道場本尊文殊菩薩摩訶薩 高祖承陽大師 太祖常濟大師 三國伝統歴代祖師 十方常住の三宝に供養し奉り、上み法乳の慈恩に酬いんことを。

冀う所は、正法興隆、学風隆昌、祖道無窮、諸縁吉祥ならんことを。

式典の挨拶で佐藤学長は「禪研究所と坐禪堂は本学の教
学の要と考えており、今後愛知学院の発展に寄与できる

禪研究所開所五十周年・坐禪堂開単三十五周年記念事業報告

ように皆さんと共に力を合わせていきたい」と述べ、中野理事長からは来賓への謝辞が述べられ、式典は無事円成した。式典終了後、研究所の前庭で坐禪堂を背景にして参加者全員による記念撮影が行われた。

記念講演会

坐禪堂での記念式典に続き、午後三時一〇分より会場を学院会館一階ホールへ移して記念講演会を開催した。講師には駒澤大学名誉教授の奈良康明先生を迎え、「釈尊『六年苦行』をめぐって―自我からの自由―」と題してご講演いただいた。奈良先生はインド仏教文化研究の第一人者であり、永平寺西堂として修行僧を指導されていることもあり、聴講者の関心も高く、会場は活況を呈した。

講演要旨

釈尊の「六年苦行」を巡って、出家後の釈尊は六年間の苦行を行なったものの、悟りをひらけず、苦行を意味なきものと知ってそれを捨て、菩提樹下で瞑想に入って悟りに至った、と一般に伝えられる。しかし、修行に費やされた



講演中の奈良康明先生

六年間は、本当に苦行だけのものであり、それは無益、無意味なものだったのであろうか。

釈尊は出家沙門として六年修行したが、それは自我との壮絶な対決であった。沙門の生活は無所有、無所得の生活であり、人間の自我、欲望を徹底して否定する生活である。そうした生活のなかで、釈尊は「苦行」を含む修行を続けていたのである。

古代インドの宗教的行法として、苦行と瞑想は二本の大きな柱であり、相互にかかわりながら発展してきた。イン

ドの言葉では、苦行とは「タパス」であり、苦行について精緻な研究をされた原実先生は、苦行は「節食のタパス」と身体を積極的に虐める「作為のタパス」に区別できると指摘している。

一方、原始仏典では、「ドゥツカラ・カーリカー」という言葉もしばしば苦行の意味に用いられ、「困難な一行為」ということで「難行」と訳される。用法が重なる面があるが、幾分の用法上の特徴は指摘できる。

「苦行」（タパス）については、仏典の記述において、そして釈尊みずからにしても、ヒンドゥー教苦行者の「作為のタパス」とみられる行法と生活法は、悟りには至らないものとして否定される。しかし、同じ「苦行」（タパス）が、修行者としての自己抑制、感官の防護、頭陀行、忍耐、努力、そしてサンガの一員としての和合などを意味する場合は、賞賛される。この場合、苦行（タパス）は否定されることはない。

他方、「難行」（ドゥツカラ・カーリカー）という言葉は、「苦行」より広い意味で用いられ、呼吸の制御や節食・断食などの基礎的な苦行をも含み、出家沙門として生

活も一般的には難行に違いない。「難行」は、苦行（タパス）を含む行法とみなせる。しかし、仏典は、「難行」という言葉で、「作為のタパス」を否定する。この場合、「苦行」（タパス）より「難行」の語が用いられる方が一般的なようである。

なぜ、苦行（タパス）として否定するのではなく、「難行」という言葉を用いたのか。おそらく、「苦行」（タパス）の否定は、当時の宗教界においてはあり得なかったことだったからと考えられる。タパスは当時のインド宗教界において重要な行法であり、内容はさまざまであっても、自我欲望を抑制する苦行はそれなりの評価がされていたに違いない。積尊としてもそれを否定する必要はなく、仏典も、苦行（タパス）を全否定することはない。自我欲望を抑制することを積極的に「苦行」として認めており、それは当時の宗教界においては当然のことだったのである。

このように、積尊の修行は、「六年苦行」というよりも、「六年難行苦行」という方が実際に近いと言える。その間、積尊は自我と対決し、真実があるがままに受容できるように自我を超える訓練をしていた。しかし、それでも悟

禅研究所開所五十周年・坐禅堂開単三十五周年記念事業報告



記念講演会

りには到達できず、釈尊は菩提樹下の瞑想に専念することになる。仏典が「智慧がひらけなかった」というのは、おそらく事実であろう。

釈尊が「六年苦行」し、苦行の無意味さを知って「苦行を捨てた」という大雑把な表現は、釈尊の六年にわたる「難行苦行」の修行生活の意味を無視することとなる。六年の間に難行、苦行を行い、捨てたものもあり、重視して行い続けたものも含まれるのである。

「六年苦行」とまとめると、苦行漬けの六年という意味が強くなり、苦行の種々の内容は捨棄されて、身体を虐める「作為のタパス」が強く意識される。そして、その苦行を捨てて、瞑想の生活に切り替えたと理解するならば、釈尊六年の修行生活を全否定することになる。

すなわち、必死に自我と対決した六年難行苦行があつてこそ、釈尊の悟りはあり得たのである。

講師略歴

一九二九年千葉県生まれ。東京大学文学部卒業後、東京大学大学院人文科学研究科インド哲学専攻修士課程修了、インド・カルカッタ大学大学院人文科学研究科博士課程修了。東

京大学から文学博士を授与される。現在、駒澤大学名誉教授、大本山永平寺西堂、東京都法清寺東堂。

記念祝賀会

記念講演会終了後、学院会館二階に会場を移し、記念祝賀会を内外の関係者およそ五十名を集めて開催した。開会の辞に続いて、佐藤学長の挨拶にはじまり、神野老師の乾杯のご発声で宴に入った。続いて各方面よりお越しいただいた来賓の方々に、それぞれ記念の言葉を頂戴し、一連の行事を締めくくった。

記念刊行物

記念事業の一環として、禅研究所主催の講演会・研究会の記録を集めた禅研叢書『仏教の知恵 禅の世界』と、『禅語にしたしむー悟りの世界からのメッセージ』をもに大法輪閣から発刊した。また、写真をふんだんに使い研究所の内容等を紹介するパンフレットを編集・改訂し発行した。

禅・茶話の会 『放光』

記念行事の一環として、二〇一四年に新設された名城公園キャンパスのアガルスタワー三階・放光台において、「禅・茶話の会 『放光』」を行うこととなった。五月にプレ開催を行い、九月以降は月一回の開催とした。日進キャンパスでの火曜参禅会と違って、いず坐禅が選択可能であり、坐禅の後で茶菓を頂戴しながら、講師による法話を聞くというスタイルである。

ホームページリニューアル

禅研究所開所五十周年に合わせて、禅研究所ホームページをリニューアルした。従来のホームページに比べて、利用者の利便性の向上を目指し、参禅会への申し込みを容易にした。また、全体的に見やすくすることで、情報発信力を高めた。従来同様に、『禅研究所紀要』バックナンバーをPDFデータで提供しており、また、最新の「禅研だより」の閲覧等が可能である。

謝辞

末筆ではあるが、この度の記念事業にあたり、ご尽力・ご協力を頂いた関係各位に心より御礼を申し上げます。に、今後とも禅研究所の運営にお力添え下さるようお願い申し上げます、報告を終える。